

栄光

説教

『未来をひらく』

創世記11章27節～12章5節

聖学院中学校高等学校教諭 久保哲哉

説教・「未来をひらく」 久保哲哉教師…1
特集・家族に伝えたいこと…2
説教・「出発」 岸牧師…5
追悼・ 萩原和子姉…6
内藤美智子姉…6
転会・おめでとう! 入谷真知子…7
長老のファイル…7
牧師の書斎から…8

ができます。私たちの神はただ「未来を閉ざす」方ではないのです。神は人の目には理不尽にも見える試練・悲劇と同時に、希望の約束を与えてくださっています。そして、行くべき道を指し示し、その約束を必ず果たすことによって私たちを、聖書が語る正しい道に導くお方です。その究極は、「死」からの「復活」でしょう。

地上に生きるすべての者はから

みつく罪ゆえに「死」すべき運命にあります。私たちは、この地上で、主イエスの言葉を聞くときに、従順にこれに従うことができない弱い者です。いつも喜んでいることができません。敵を愛することができません。正しい者は一人もいません。その点で、すべての者が罪人です。私たちはその罪のゆえに、神の国を受け継ぐことができませぬ。その意味で、すべての人の未来は閉じられています。

しかし、信仰とは、たとえ、絶望の極致である「死」を前にしたとしても、神を「仰ぐ（礼拝する）ことと与えられる「必ず助けは来る」という希望を「信」じることです。罪の赦しを信じる者は、主

なる神がイエス・キリストを復活させたのと同じように、私たちが復活することができると信じるのです。だからこそ、私たちの運命は死で終わるのではないのです。人間の絶望の極致である「死」をも打ち破る神の力です。疫病あり、自然災害あり、戦争あり。本当にどうにもならない現実がありますけれども、主なる神によって解決を見ない苦しみはないのです。

神こそが「未来をひらく」のです。信仰を与えられた私たちは希望をもって、ひらかれた未来を生きますのです。主イエス・キリストの十字架の出来事によって罪を赦されることで、私たちが神の子とされ、聖なる者とされ、それぞれ賜物を生かして愛のわざ、聖なるわざに励む未来です。そんな聖なる者たちが平和を作り出す幸いな者とされたとき、私たちの未来は、平和へとひらかれていくのです。

この主なる神の御心を信じる者は、神の愛と祝福によって元気づけられ、現在の苦難や試練を忍耐し、希望の約束の実現を待ち望む力を得ることができます。

(1)

栄光

創世記の11章10節以下にはアブラハムの祖先の系図が記されています。そこには、誰が何年「生きた」のかと、「息子や娘をもうけた」のかと記されています。旧約の時代は長寿と跡取りの誕生は神からの祝福の象徴でしたが、アブラハムの父であるテラの系図からのみ「死んだ」ということと、「子ども

ができなかった」という暗い現実が記されるようになります。この事実について、ある牧師は「未来がひらかれていない系図である」といいました。

「なぜ私だけ、神の祝福から外れているのか」。その理不尽さ、虚無感、また絶望という中で、アブラハムは現代では考えられないほどの悲しみ・苦しみと向き合っ

ていたに違いありません。このまま、アブラハムの将来はひらかれることなく、悲しみのまま終わるのか。そのことが問題となります。このような悲劇のとき、自分の力ではどうにもならない現実・試練・理不尽に直面したとき、現代において「未来をひらく」にはどうしたらよいか。

信仰の父アブラハムは「主の言葉に従って旅立った」(12・4)とあります。主の言葉が臨んだなら、直ちに従うアブラハムの姿が印象的です。私たちもこの信仰の姿勢を見習いたいものです。ただ、アブラハムが選んだ「従う」道は、他の進路が主なる神によって「閉ざされた」結果、彼の前に残された唯一の道であったとも見るこ

家族に伝えたい“言葉”

5月には母の日、6月には父の日があり、家族のことを考える季節です。

コロナ禍が続いて、なかなか家族に会えない方もいると思います。

今、あなたが家族に伝えたいことは何ですか？



今思っていること

植野敦子

昔からあまり後を振り返らない性質でした。歳を重ねて最近は、ふとした昔の風景が昨日のことのように蘇ってくることがあります。私は洋服の仕事をしていました。夕方4時半には父も会社から帰って来ますので、私もそれまでには家に帰り、皆で夕食を始めるのが我が家の習わしでした。夕暮れ前の太陽がひときわ眩しく、近くの家からはピアノや尺八等の稽古の音色が聞こえたりして、のんびりしたものでした。それなどを聞きながら、「随分上手になったなあ」なんて、会ったこともないお宅の人に思いを馳せたりしました。今は何も聞こえませんが、通りすがりの人とも会釈もしない世の中になりました。お家にお呼ばれも少なくなりました。子どもの頃は、ご近所のおばさんが大声で「敦子ちゃん、お芋がふけたから食べにいらっしやい」とか

「どうもろこしが焼けたから」とか呼んでくれて、いそいそと頂きにあがったものです。

家事も一つひとつ丁寧にやっていたら一日があつという間に過ぎたものです。家電の進化は喜ばしいことですが、現代の人々が血眼になっているダイエットなどは、くたくたになるまで身体をしっかりと動かして家の事をやっていた時代には不要だったように思えるのです。単純に今の世の中を憂いているわけではありません。

歳を重ねて人生の爽りとは、見えなかつた事が見えてくることなんだと実感しています。理解できなかった事が自分なりに釈然としたり、角度を変えて何事も眺められるようになったこと。そして見えない世界に大切な事が隠されていることが少しずつわかって来ました。

何事が起きても平安をどっしりと心の真中において、構えていられる自信がきつ々つあるような気がします。

今、健康でこんなにゆつたりとした幸せをくださった神様に心から感謝の毎日です。

祈りのバトン

岸 恭子

昨年、私たち夫婦は結婚40年を迎えました。決して平坦な道ではありませんでしたが、共に健康を支えられ、教会に仕えることができ、有難いと思っています。

結婚後、幼い長男を連れて、この経堂北教会の群れに加えて頂いた事が、私にとって大きな節目になりました。若く未熟だったため新しい生活や育児に悪戦苦闘し、不安ばかりで自分を見失っていた頃、夫が言ってくれた2つの事は、今でも心に残っています。それは、『まず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる』（マタイ6・33）を信じて歩み続ければ大丈夫だから』。

「一信徒として、自分らしく自分のやれる事をやればいい」です。失敗もありましたが自分の立場をわきまえ、あまり無理をせず大らかに歩んでこられたことを感謝

しています。

私には2人の息子がいます。長男は幼い頃から夫に似て、落ち着きがなく、人の話を聞かず、いつも誰かにちよっかいをだすなど、なかなかの問題児でした。2歳半違いの弟が生まれると、ますますひどくなり私たちを悩ませました。息子たちのためと思いCS、礼拝、集会、会堂清掃に連れて行き、なんとか教会につながって欲しいと願いました。しかし、高校生になって以降、2人共教会から離れてしまいました。振り返ると、押し付けがましい態度で接し、ちゃんと向き合えていなかったと反省しています。本当に伝えたい事を心を込めて伝えることは難しく、物分かりの良い母親でいたい自分との闘いです。

目を覆いたくなるような戦争の悲惨さ、長引くコロナ禍によって、この世界に闇が広がって行く恐ろしさを感じます。今こそ皆が祈りのバトンをつないでいく時です。息子たちにも平和のため、隣人のため、家族のために祈ってほしい。人間の最も美しい姿は祈りの姿だと信じているからです。

ありがとう そして

照内眞知子

この依頼文を見て最初に思ったのは6年前に亡くなった母と話したいことでした。反発したり、批判したりしましたが、季節が感じられる時、台所仕事をしている時、「ねっ…」と母がいれば話していただろうなと度々思います。「総会が無事終わったわよ」「こちらは来週」など、教会でのいろいろな話せる相手でした。身近な人を次々見送り、あちらに行くのはなかなか大変なことだと知らされ、今度は自分たちの番になって思いを巡らせます。

私が自分の信仰について考えはじめた頃、性格からか、時代だったのか、両親の考えだったのか、育った教会の特色だったのか、キリスト教だけが正しく、他は間違っていると思いついていました。葬儀や法事などの席でどのようにするべきなのか、ぎこちなくとまどっていました。今は、その方が

大切にしている信仰ならば尊重したいと思っています。ですから、以前ほど息苦しく思うことはなくなっています。私は結婚式を教会でしました。葬儀も教会でしてほしい、多分そうしてくれるだろうと思っています。そして、他の人の信仰、心情も尊重したい。私には神様を知り、信仰へと導いてくれる家族、環境が与えられました。では今、私は家族にどう接しているか。家族に強く勧めないのは臆病なのか、怠惰なのか。自分が強要されるのは嫌だから、相手にも強く勧めないのか。

普段の姿勢、言葉の端々から私を理解してくれているのでしよう。信仰を問われるような問いかけをされた時、ぴたりとした答えができる時であれば、「信じている人はそういう言い方をするよね」と言われてしまうこともありま。そして今のところ一緒に礼拝に出席することはできていません。『私の信仰生活を尊重してくれてありがとう。私は神様を信じて生きてきて幸せでした。みんなにも神様を信じて生きる生き方をしたいと願っています』。

伝えたい家族のこと

額賀洋子

私は千葉県八千代市に住んでいます。娘の恵と孫の啓太と3人で暮らしています。

孫の啓太は小さい時、いたずらばかりしていました。スーパール行くと、バナナやアボカドを投げたので、スーパールの人に謝ってばかりいました。私たちのお財布からお金を取っていくこともありましたが、でも「人の物をだまってるのはいけないよ」と伝えたらよく分かったようです。

今は成長して、人の気持ちがわかるやさしい子です。お買い物に行き、水などを買うと啓太がカートに入れて運んでくれます。お小遣いを少しあげていますが、使わないで貯めて、ママや私の誕生日にプレゼントを買ってくれます。優しい子に育ってくれて本当に感謝しています。

娘の恵は木曜日以外は会社に行きますが、土日、祭日関係なしに

オンラインで仕事をしています。かなり疲れているようです。オンラインで仕事をしている時は啓太も私も部屋に入れません。料理は手際の良い恵が作ります。啓太は「ママの料理、おいしい」と言っていてよく食べます。私は左足の手術をしているため何事も素早くできず、恵がイライラすることもありますが、恵がイライラすることもあるようです。

息子の一は渋谷で1人暮らしをしています。人からも慕われていて、今は仲間と仕事をし、自由な生活です。大学生の時はカンボジアや、ビートルズ好きでイギリスに行ったり、ゲバラに憧れてカナダにも行きました。啓太が小さい時、ドイツニーランドに連れて行ってくれたり、よく面倒を見てくれました。このごろはギターを弾きライブ配信をして、毎日楽しく過ごしているようです。私の誕生日にはいつも一緒に食事に誘ってくれます。

恵も細かい事にうるさくしますが、旅行に連れて行ってくれます。今はコロナ禍でいずれもできません。早くコロナがおさまるように祈るばかりです。

天国の母に
感謝を伝えたい

村田佳子

母との別れは突然訪れました。

その当時、悲しみで心が押しつぶされそうになっていようと、目の前にやらなければならぬ事が山積みしました。それは、一方で私たち残された家族にとって、今日という現実を生きる後押しにもなりました。子どもを育て、目の前の仕事をこなすことで、辛うじて立てていたと思います

母の死から12年経過し、私たち家族はゆつくりと受け入れていきます。父はお陰様で健康を保ち、元気に過ごしています。おばあちゃん子だった娘は成人し、アメリカにて留学生生活を送っています。他の孫で結婚したものもあり、母にとって曾孫が誕生しました。

人生の様々な喜びの場面で、「母がこの場にいてくれたらどんなに喜んでくれただろう」と、いまだに深い喪失感に苛まれます。幸福

感と同時に寂しさを覚えます。癒える日はくるのでしょうか。私は日々、教え子たちに向かい、バレエの指導にあたる生活の中、時間的な余裕はありません。一方で、仕事と社会生活に忙しく過ごしていることで元気な自分を保てています。

ふと「母はどんな風に過ごしていただろう」と、時折り母の人生を振り返り、想いを馳せます。何を大切にし、誇りに思い、どんな役割を果たしてきたか、私たちが家族に何を伝えてきたのか。それらをなぞること、絆は太く、更に強くなること、私は思っています。母との絆が、私たち家族をいまだに支えてくれていてと思います

母は人生の要所において常に側で背中を押してくれる存在でした。常に前を向かせてくれました。母に語りきれない程の感謝を伝えたいです。私が今こうしていられるのは、母のお陰です。これから見守っていてください。

説教

『出発』

イザヤ書55章8節～11節
マルコによる福音書16章9節～20節

岸 俊彦

「婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである」(16・8)。マルコはこの言葉で自らの福音書を閉じました。その先はどうなったか、他の弟子たちが書き加えた箇所が16・9以下です。

マグダラのマリアは、キリストの死を悼んで泣き悲しんでいた弟子たちに告げました。「キリストは復活され、生きておられる」。しかし、弟子たちは信じませんでした(11節)。

「復活のキリストに出会った」と二人の弟子たちが証言しても弟子たちは「二人の言うことも信じなかった」のです(13節)。

十字架のキリストを見捨て、裏切った弟子たちは後悔して悔い改め、すっかり生まれ変わったわけではありませんでした。復活のキリストが現れ、「その不信仰とか

たくなな心をおとがめに」なりました(14節)。

今日イースターを祝うために久しぶりに大勢の方が教会に集いました。嬉しいことです。しかし、集まってきた私たちと「その不信仰とかたくなな心」は何の関わりもないのでしょうか。

私たちの言葉にしる行動にしろ、復活のキリストの御言葉と御業がどんなに真実か指し示すことはなかなか出来ません。「なかなかやってクリスチャン」と言われても返す言葉がありません。

マルコの短い方の付加は、「イエス御自身も、東から西まで、彼らを通して、永遠の救いに関する聖なる朽ちることのない福音を広められた。アーメン」で閉じられます。復活のキリストが不信仰で心頑なな弟子たちと共に働いてくたさいます。私たちがまず働くのではありません。私たちの言葉と

行いが、まずキリストの真実を証しするものではありません。まず主が働いてください。信じない私たちに現れ、その頑なな心を咎め、悔い改めへと導いてください。主御自身が、弟子たちを通して、私たちを通して、この教会を通して、永遠の救いに関する聖なる朽ちることのない福音を広めてください。この主こそ世田谷の片隅で礼拝を続けている私たちの教会の土台です。この土台に立つから、世の混乱が続く今も、新年度、主イエス・キリストの復活を祝い、主が共にいてくださることを信じて、私たちは新たに出发できるのです。

復活のキリストが現れたくらいでは、どうにもならないとさえ思えることもあるでしょう。キリストは本当に復活したのかと、疑いの目を向けられて、私たちは跳ね返すことができますでしょうか。

「天が地を高く超えているように、わたしの道は、あなたたちの道を、わたしの思いは、あなたたちの思いを、高く超えている」(イザヤ55・9)のです。主イエス・キリストを復活させてくださった

神は、「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。わたしたちの神に立ち帰るならば、豊かに赦してください」(同7節)御方です。この主なる神に遣わされ、十字架の死を遂げ、死者の中から復活され、天に昇られた主イエス・キリストは、弟子たちに、私たちにその憐れみを示し、神に立ち帰る道を開き、豊かに赦してくださいます。

「わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす」(同11節)のです。

その計り知れない主の恵みによって、戦争の時代もコロナ禍でも休むことなく毎日曜日、主の御名の下に共に集い、御言葉に聞き従い、主を賛美し、アーメンと、私たちは礼拝を続けています。そしてこの恵みを分かちあうために世に遣わされます。まどろっこしいように思えても、停滞しているように見えても、私たちの中に、私たちを通して、主が生きて働いてくださっているからです。

追悼

恵の生涯

故・
萩原和子姉

妻の和子は、経堂小学校の第一期生であり、首席で卒業後、東京府立第三高等女学校に入学。その後、東京女子大英文科在学中に当教会で受洗しました。今年3月13日に礼拝に参加した後、3月25日に91歳で突然逝去致しました。葬儀では、岸先生の故人への思いのこもった温かいお言葉を頂き、感謝申し上げます。

私と和子との出会いは当教会の青年会でした。村田正亮牧師のもと結婚式を挙げました。和子は大学卒業後奨学金を得て、フルブライト留学資金を得た私と米国の大学に1年間留学しました。この貴重な経験が私の一番の思い出です。和子の趣味は、料理、庭仕事、手芸、書道で、我が家には季節の花々が活けられ、和子の書いた書も掲げられ、私は繰返し読み、楽

しみました。読書や執筆もよくしておりました。特技は英語で、翻訳奉仕や各国の若者のホストファミリーをしていました。有隣ホームで奉仕活動も長年続けてきました。体操教室にも通い続け、健脚です。毎日重い買い物袋をさげて帰ってきました。無類の洗濯好きでもあり、本当に働き者でした。

また、熱心に教会活動を続け、息子2人、娘1人、男孫3人、女孫3人いて、楽しく過ごせたことを夫として嬉しく思います。70年近く苦楽を共に生きて参りましたが、先立たれたことは残念ですが、故人は幸せだったと思います。

和子の両親も当教会で受洗し、葬儀もいたしました。天国で再会していることと思います。大好きな花に囲まれての旅立ちに、故人も満足していることでしょう。この度追悼文の寄稿を依頼され、妻のことを子どもたちと共に深く思い起こす機会を与えてくださり、心より感謝申し上げます。これまで長きに渡り、和子へのご厚情をいただきました教会員の皆様にもこの場をお借りして御礼を申し上げます。
(萩原敏雄)

母を想って

故・
内藤美智子姉

母は晩年認知症になり、私のごとも自分のことも時間も場所も、何もかも分からなくなりました。会話も成立しなくなり、最後は簡単な言葉が少し残っただけでした。自分の思いを言葉で伝えることのなくなった母には、とにかく穏やかに、苦痛なく過ごしてほしいというのが私の願いであり、そのようになったと思います。割合と元気だったのに突然主に召されたことは驚きでしたが、苦しまず静かに逝ったことは幸いです。母の人生においては認知症になる前が大半ですので、まだ元気だった時の母のことを話します。母はおしゃべりな牧師夫人でした。結婚してからはずっと、牧師である父の赴任先の6つの教会に住み、教会員をよく家に招き入れていました。社交的で積極的に人と関わる人でした。父の牧会を共に担っていたのだと思います。

私にとってはちよつと口うるさい存在の母でしたが、そんな母から教えられたことで、私が大切に思っていることがあります。それは「クリスチャンなんだから他人にやさしくする」ということです。世間の人からみてクリスチャンは良い人だと思われることが大切、ということですが。昔はよくあつた訪問販売など、私ははつきり断るほうがいいと思うタイプですが、母は「クリスチャンなんだからやさしく」となります。買ってあげるといふこともあるし、断るにしてもできるだけソフトに断るので、伝道につながると思っております。比較的ドライな性格の私は、最初はこのことにそれほど共感していませんでしたが、徐々に、ことあるごとにその母の姿勢はよかつたと思えるようになって、私もそうしようと思うようになれました。母は強い信仰を持ったまま認知症になり、その信仰を失うことはありませんでした。安心して神様にすべてをゆだねて過ごし、静かに天に召されたことを感謝します。
(綱川めぐみ)

転会おめでとー！

転会にあたって

入谷眞知子

イースターの日に、主のお導き

により経堂北教会に転会させていただきました。近所なので好都合だわ！」と膝を痛めていた私は、昨年から主日礼拝に時々伺っておりましたが、聖書の面白さ・奥深さに目覚めたのです。細かな活字の引照を確認することも、ジグソー・パズルが少しずつ形になるような楽しい学びとなりました。

ところで、転会するには長老会の承認が必要不可欠だそう、オツカナビックリ面接に臨みましたが、長老の方々は皆若々しく、終始和やかな雰囲気、密かに安堵の溜め息をついたのです。けれども後に、長老は（原則）70歳以下の規定があるのを知り、長老方は「若々しい」ではなく、「お若い」方々でした。失礼いたしました。一方私は、還暦を過ぎて受洗し

た、信仰歴の極く極く浅い者です。これは偏に『汝の少き日に汝の造主を覚え』なかつたからです。

しかしながら、『年のよりて我は早何も楽しむ所無し』と嘆く程には未だ年老いていないことを幸いに思っています。教会に通うことが許され、礼拝や様々な学びの場、種々の交わりの中で、神様の御言葉をいただけることは、感謝以外の何物でもありませんから。

と申しますのも、数年前に帰天しました母、ユニケ鈴木順子はクリスチャン・ホームに生まれ、幼児洗礼を受けた聖公会の信徒でした。が夫の理解が得られず、教会へ通うことが叶いませんでした。愛唱讃美歌は12番の「みどりもふかき」。メロディーが明るく清々しい気持ちになると。聖書箇所は1コリント13章『愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず。』寛容と慈悲の次に妬みがあるのは、それが諸悪の根源だからよ、と言われることは鮮明に覚えています。「信徒になる」より「信徒である」のが肝要であるとお言葉を今一度胸に刻みまして。

どうぞ宜しくお願いいたします。

長老のファイル

2022年度が始まりました。

伝道師を育て牧師として送り出す教会として6人目の狩野進之佑牧師を送り出し、新年度は教職1名、長老12名体制で長老会を運営して行くこととなります。

4月24日に開催された定期教会総会では、長老選挙によつて任期満了の半数6名が改選され、新年度の長老会が正式に発足いたしました。

長老選挙においては従来、改選数の倍数である12名の参考候補を挙げて選挙を行ってきましたが、今年度は10名の参考候補を挙げて選挙を行うこととなりました。この参考候補の人选を長老会で検討するにあたり、参考資料として、70歳未満、現住2年を超える方々のリストが配られました。現住隣餐会員183名中、この条件を満たす会員は65名。そしてコロナ禍で礼拝になかなか出席できない方のいる状況が続いているため、長老の参考候補として挙げられるのは現職の長老以外では非常に限られた

人数となりました。その中から12名のお名前を挙げることは到底できないと判断し、結果、今回は10名の方々を参考候補として挙げることとなったわけです。12名の長老と教職で運営されている長老会も今後は、その人数を減らして運営していくことも考えなければなりません。

主任者の岸牧師も定年まであと3年。この期間に次の体制を準備していかなければなりません。改革派的福音主義教会の伝統から生まれた経堂北教会は、どのような教会を目指すのか、そのためにどのような牧師を招聘するのか、慎重に且つ迅速に検討しなければなりません。経堂北教会宣教基本方針を見直し、また必要があれば経堂北教会規則の変更をしなければなりません。長老会はこれら重要な案件においてスケジュールを立てて透明性を持って取り組んでまいります。

どうぞ皆さま、これらの大事な事柄が神様の御心になつた形で行われますよう、お祈りのうちにお覚えください。（大西 順）

個人消息



牧師の書齋から

3年振りに牧師1人となりました。この20年で3年間、牧師1人を経験しています。これまでは伝道師を招聘しても神学校から紹介されなかったためです。今年度は初めて教勢、財政の面から伝道師を招聘できませんでした。コロナ禍と教会員の高齢化は確実に教会に影響を及ぼしています。

以前は、1人の方が自分のペースで仕事ができるから気楽な面も

あると思っていました。一度に複数の仕事もできました。

さて4月から、集会は水曜夜の聖書研究祈祷会の担当が増えました。週報や『栄光』の印刷も仕事として増えたと言えは増えたのですが、高性能の印刷機が印刷するのですから大した仕事ではありません。ボックスへの配付は事務手伝いの岩井直子さんと妻が手伝ってくれます。大昔、印刷所に原稿を届け、ゲラを校正していた時代もあったのです。教会総会資料の作成は大袈裟ながら死に物狂い

でした。その時代に比べれば事務的仕事量は大了ことはありません。週日の仕事は1人でも何とかやりくりできるでしょう。

ただし、今のところ日曜日は正直厳しい。説教しながらもう一つのことはできません。礼拝後、来会者と挨拶している間に「この書類用意して」とは頼めません。2人で日曜日働いていたことを実感させられています。当然ですが1人となったのですから、特に日曜日は体制を整える必要があります。あとは今まで以上に準備して日

掲示板



○主日礼拝 5月1日(日) 午前10:15
説教「生きた水」ヨハネ7:37-39
上野峻一教師

○子どもの日合同礼拝
5月8日(日) 午前10:15

○主日礼拝 5月29日(日) 午前10:15
説教 種房正勝教師

○初夏の集い
6月26日(日) 午前10:15～午後1:00
説教・講演 菊地順教師 (聖学院大学特任教授)

編集後記



▽教会総会の後、雨で急に寒くなったなか、編集作業をしています。春の雨は冷えますね。(酒井)

「栄光」2022年5月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧師：岸 俊彦
編集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp

曜日に臨むことです。「日曜日でいいや」と思うと大変な目に遭います。コロナ禍もあってコミュニケーションがますます大切になります。設備、備品の不具合をはじめ、気付いたことがあったらどんなことでもぜひお知らせください。ご自分で対応できることでしたらその場で解決してくださいと助かります。

幸いなのは、何をしてよいのか分からないということが無いことです。一日一日できることを積み重ねて日曜日に備えます。(岸)